

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

琉球語二段系動詞「起きる」の活用

著者	中本 正智
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	13
ページ	106-130
発行年	1988-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/11979

琉球語二段系動詞「起きる」の活用

中 本 正 智

動詞の二段系活用の変遷

二段系活用の動詞「起きる」は、現代日本語で次のように活用している。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
o-ki	o-ki	o-kiru	o-kiru	o-kire	o-kiro

第二音節の ki をみれば、イ段だけに活用しているから現代日本語において一段活用に属するとみてよい。ところが、この活用形をさかのぼると、時代によって変化してきたことがわかる。室町時代においては、

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
o-ki	o-ki	o-kuru	o-kuru	o-kure	o-kijo

であり、第二音節をみると、ki と ku、つまりイ段とウ段の二段に活用している。これは室町時代に二段活用であったのが、ku が ki に侵されてなくなった結果である。平安時代においては、

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
o-ki	o-ki	o-ku	o-kuru	o-kure	o-kijo

であり、二段活用であった。室町時代と異なる点は、終止形の o-ku が保たれていることである。これは室町時代以降、連体形の o-kuru が終止形のはたらきをになうことによって消滅した形である。

奈良時代の甲類と乙類の音韻の区別を反映している形をあげると、

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
おき乙	おき乙	おく	おくる	おくれ	おき乙よ乙

である。一段活用の「き_甲」(着)と対立する音韻であった。これについて、大野晋博士は「万葉時代の音韻」『万葉集大成』(平凡社)において、次のように推定しておられる。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ōkī	ōkī	ōku	ōkure	ōkure	ōkī-jō
ōkō-i	ōkō-i	ōkī-u	ōkō-uru	ōkō-urai	ōkī-jō

これに対し、馬淵和夫博士は、『上代のことば』(至文堂)において、批判を加えつつ、次のように推定しておられる。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ōkō→ōkī	ōkō-i	ōku	ōku-ru	ōku-re	ōkī-jō

否定形「起きない」

分布語

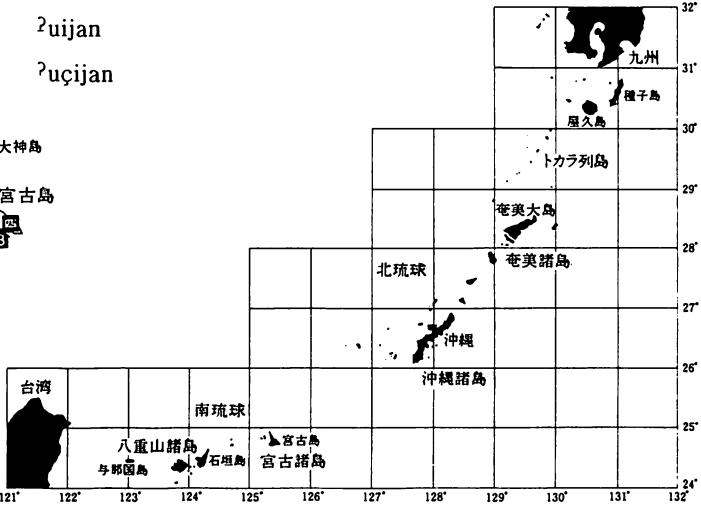
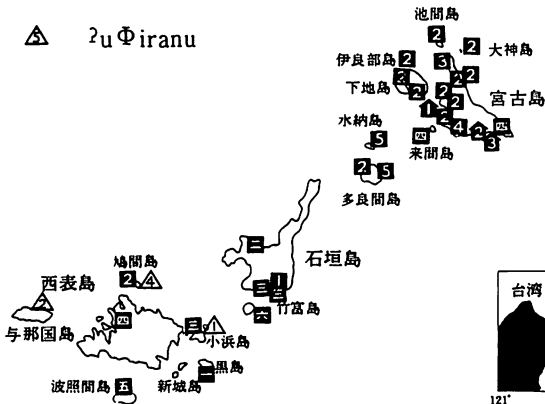
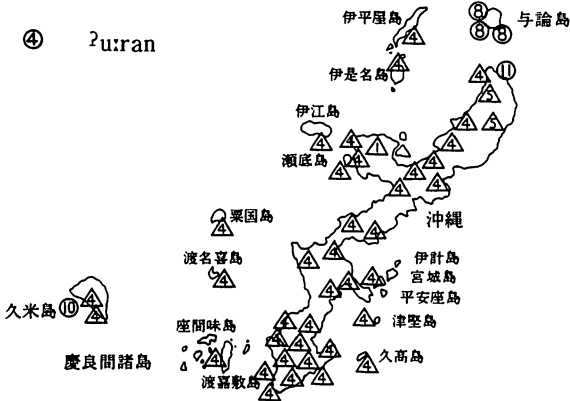
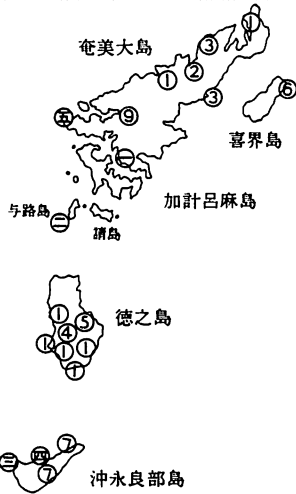
オキ-語

- 1 ukinu
- 2 ukin
- 3 ukidja:ran
- 4 ukidza:n
- 5 ukiman
- ⊖ Φukunun
- ⊖ Φukunu
- ⊖ ʔukunu
- ⊖ ukun
- ⊖ ʔugunu
- ⊖ Φu:nu
- ⬆ ukudja:n
- ⬆ ukudjan
- ⬆ ukudzan

オキラ-系

- △ Φukiranu
- △ ʔugiranun
- △ ʔukiranu
- △ ʔukiran
- △ ʔuΦiranu

- ⊖ ʔuɕirjam
- ⊖ wɪ:ra:m
- ⊖ ʔuiramu
- ⊖ ʔuiram
- ⊖ ʔu:ram
- ① ʔuīran
- ② Φuīran
- ③ Φuran
- ④ ʔu:ran
- ⑤ ʔwīran
- ⑥ wīran
- ⑦ ʔuiran
- ⑧ ʔuirannu
- ⑨ xē:ran
- ⑩ ʔuijan
- ⑪ ʔuɕijan



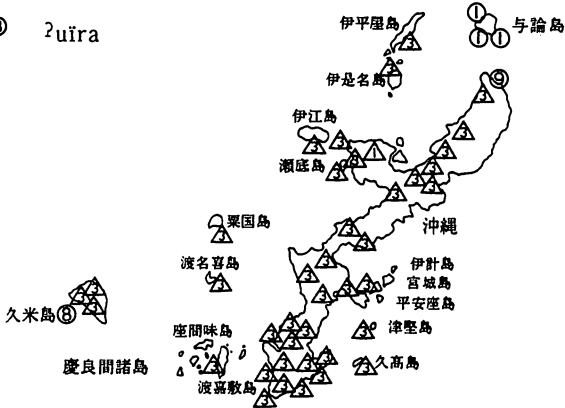
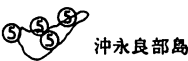
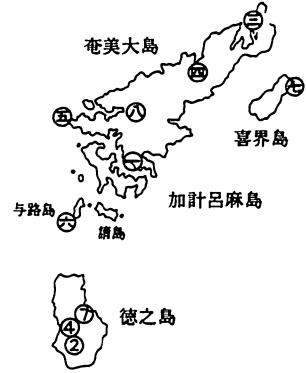
意志形「起きよう」

分布語

オキ-系

- ukjo:
- ukju:
- ukju
- uko:
- uko
- Φuko:
- uku
- Φuku
- 2ugo:
- ukim:
- uki:
- uki

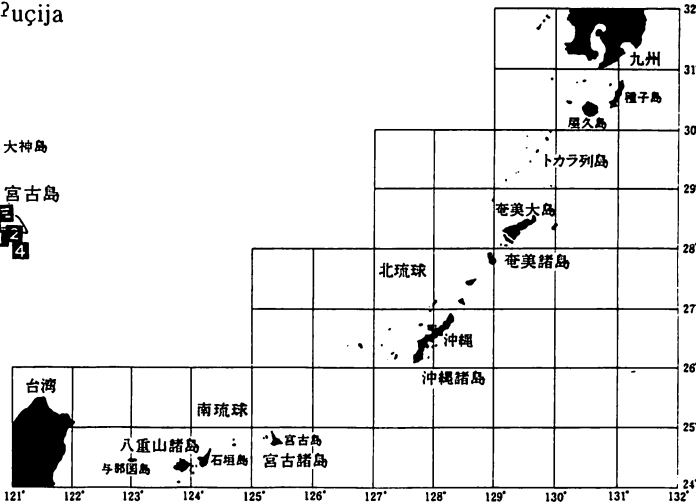
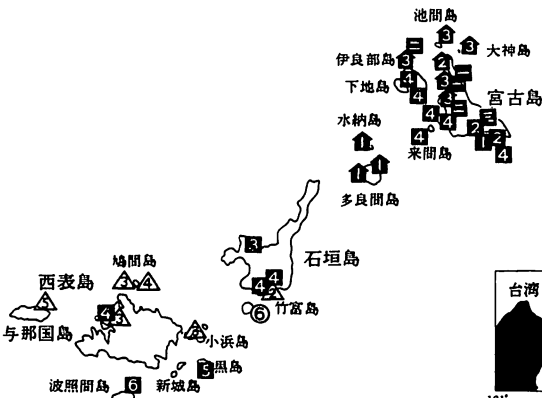
- 2uīro
- Φuīro
- 2u:ro:
- wī:ru:
- wī:ro:
- xē:ro:
- 2uiran
- 2uīra:
- 2uīra



オキラ-系

- Φukira:
- 2ukira:
- 2ukira
- 2uka:
- 2ugiru:
- 2uçīrjo:
- 2uīro:

- 2u:ra
- 2uira
- Φuira
- 2wī:ra
- Φuija
- 2uçija



連用形「起き」

分布語

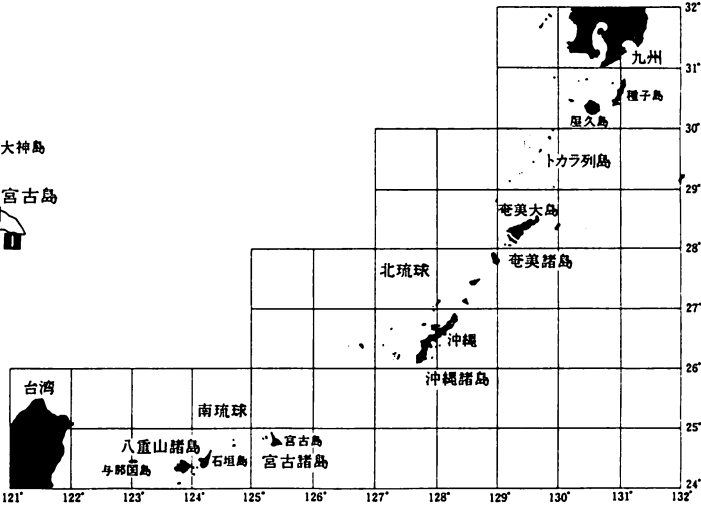
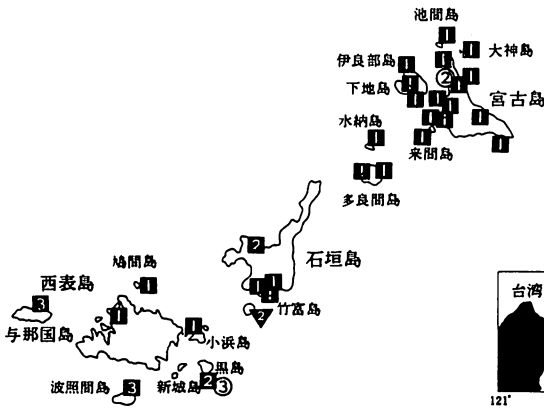
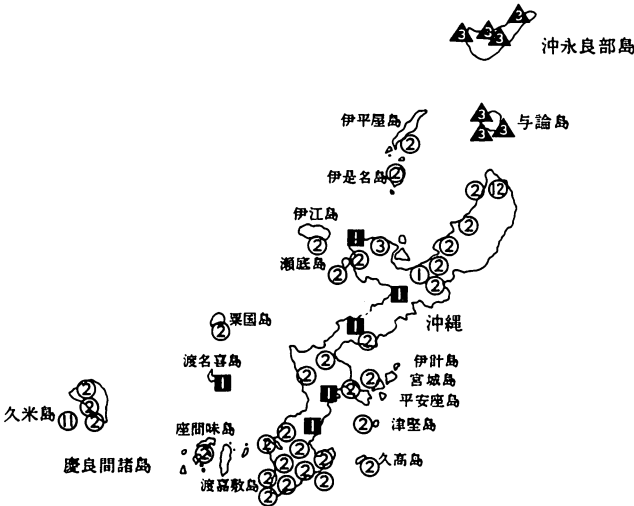
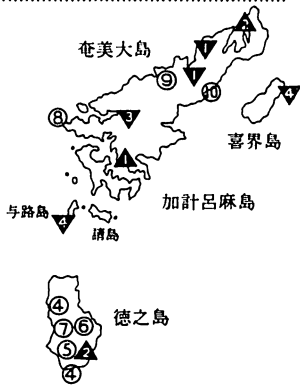
オキ系

- ① (2)uki
- ② Φuki
- ③ 2ugi
- ▲ 2uçĩ
- ▲ 2uĩ
- ▲ 2ui
- ▼ Φuĩ
- ▼ Φui
- ▼ xê:
- ▼ wĩ:

オキリ系

- ① 2ukiri
- ② (2)uki:
- ③ Φukiri
- ④ 2uĩri
- ⑤ 2uĩ
- ⑥ 2wĩ:ri
- ⑦ 2u:ri
- ⑧ 2ur
- ⑨ Φuĩri

- ⑩ Φuri
- ⑪ Φui:
- ⑫ 2uçi:

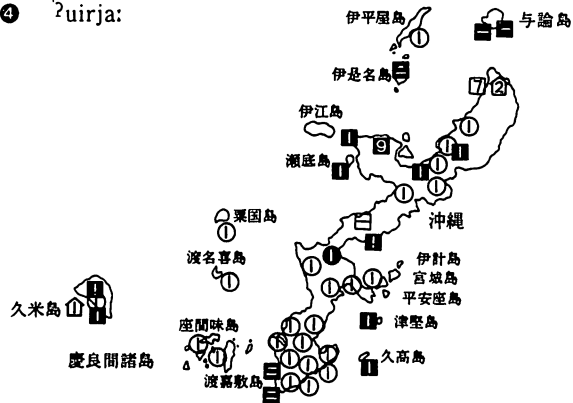
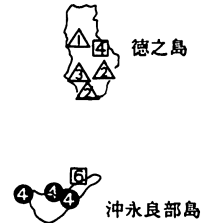
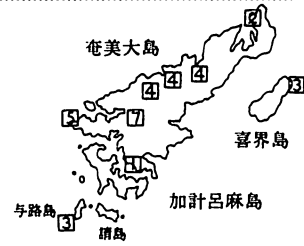


条件形「起されば」

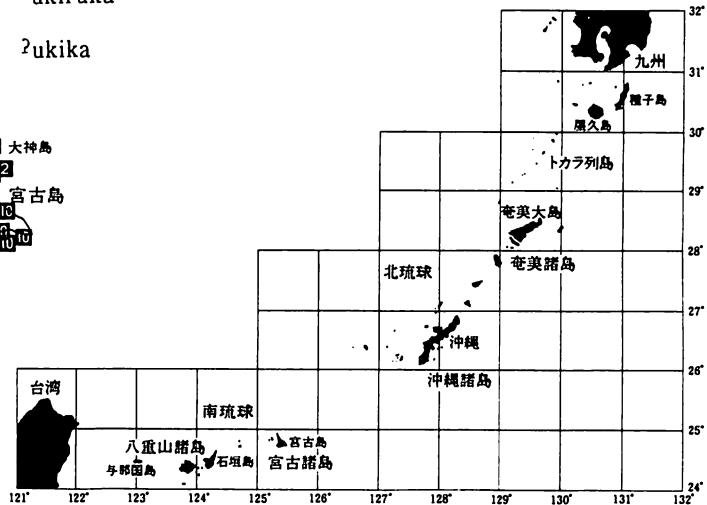
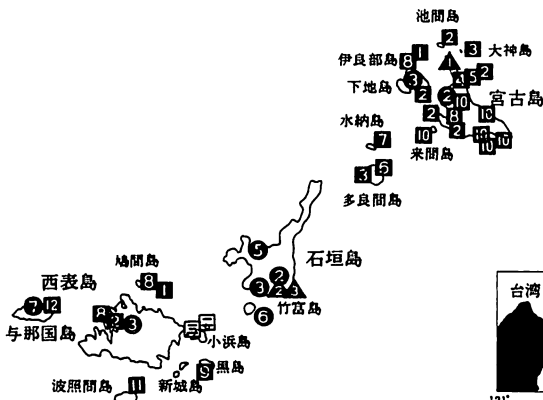
分布語

- 1 2ukiriba
- 2 ukiriba
- 3 ukirība
- 4 ukiība
- 5 ukizziba
- 6 ukilba
- 7 (2)uki:ba
- 8 (2)ukiba
- 9 Φukiriba
- 10 ukiruba
- 11 2ugiriba
- 12 2ugiruba
- 13 2uçirba
- 14 2uīrība
- 15 wī:rība
- 16 Φuīrība
- 17 2urība
- 18 2uiriba
- 19 xē:bba
- 20 Φuimba
- 21 2uçi:ba

- 2uiribo:
- ▣ 2ukiro:
- ▢ 2ukiruwa
- ▤ 2ukiriwa
- ▥ 2ukiwa
- ① 2ukira:
- ② 2ukirja
- ③ (2)ukirja:
- ④ 2uirja:



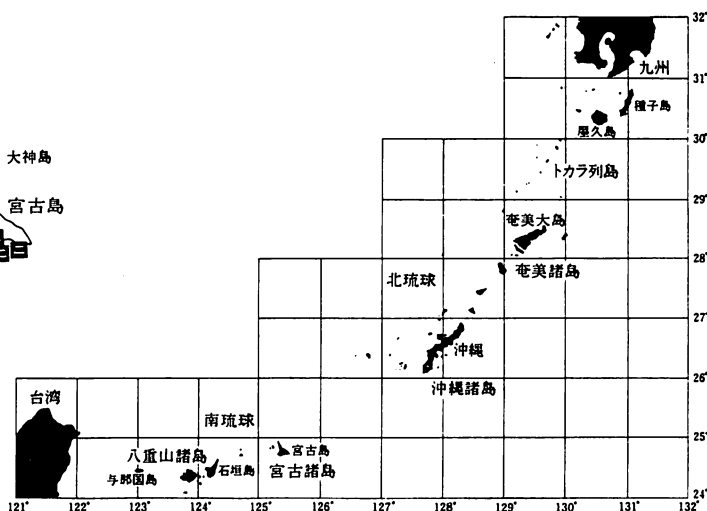
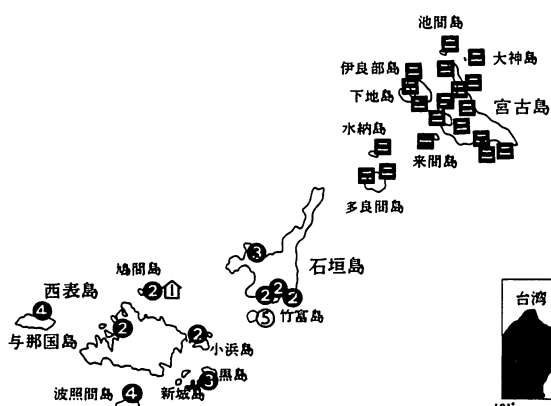
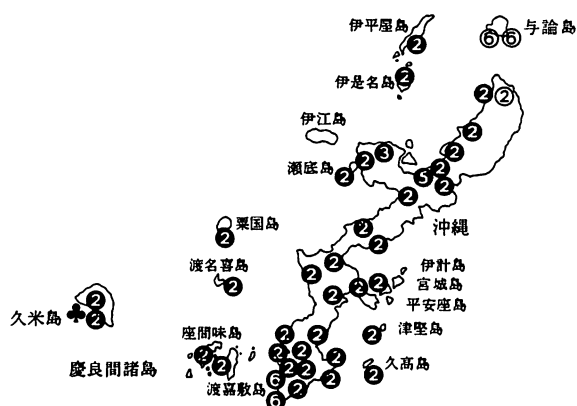
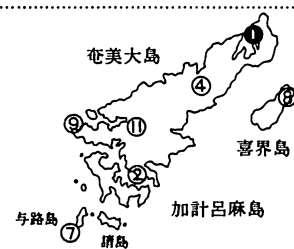
- ⑤ Φukirja:
- ⑥ Φuirja
- ⑦ 2ugirja
- ⑧ 2ukire:
- ▲ ukidigara
- ▲ 2ukiruka
- ▲ 2ukika
- △ 2uītika
- △ 2uītika
- △ 2utika
- △ 2wītika



命令形「起きよ」

分布語

- ukiro
- ▢ ukiru
- ① ʔukĩrĩ
- ② ʔukiri(:)
- ③ Φukiri
- ④ ʔugiri
- ⑤ ʔukire:
- ⑥ ʔukiro:
- ⌈ ʔuki
- ① ʔuçĩrĩ
- ② ʔuçiri
- ③ ʔuĩrĩ
- ④ Φuĩrĩ
- ⑤ Φuiri
- ⑥ ʔuiri
- ⑦ (ʔ)wĩ:rĩ(:)
- ⑧ wĩ:ri
- ⑨ ʔu:rĩ
- ⑩ ʔuĩre
- ⑪ xẽ:rĩ
- ♣ Φuimba



連体形「起きる」

分布語

オキ系

↑ 2uki

㊦ 2ugi

㊦ Φuku

㊦ Φu:

オキリ系

▲ ukirī

▲ ukil

▲ ukiī

▲ uki:

▲ Φuki:

オキ(ラ)ル系

■ 2ukijuru

■ 2uki:ru

■ 2ukiru

■ 2ugiru

■ Φuiru

■ Φukiru

■ 2uijuru

■ 2wī:ruru

■ 2uçi:ru

オキン系

▲ 2ukin

▲ 2uīn

オキリラン系

① 2uçīrjun

② 2uīrjun

③ Φuīrun

④ 2uīrun

⑤ 2u:run

⑥ wī:jun

⑦ 2uījun

⑧ 2u:jun

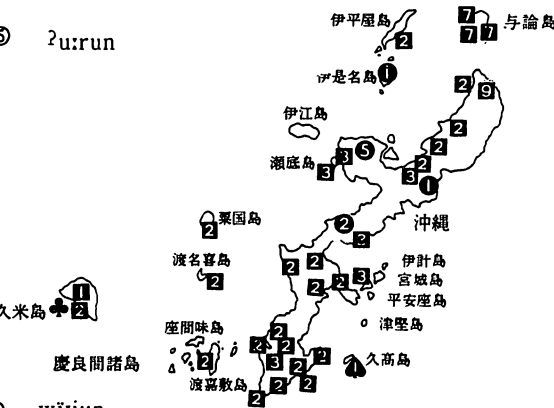
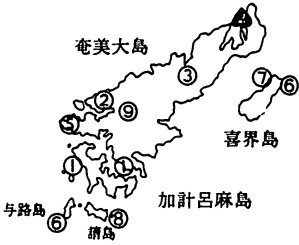
⑨ xē:jun

オキ(リラ)ヌ系

① 2uki:nu

② 2ukinu

③ 2uinu

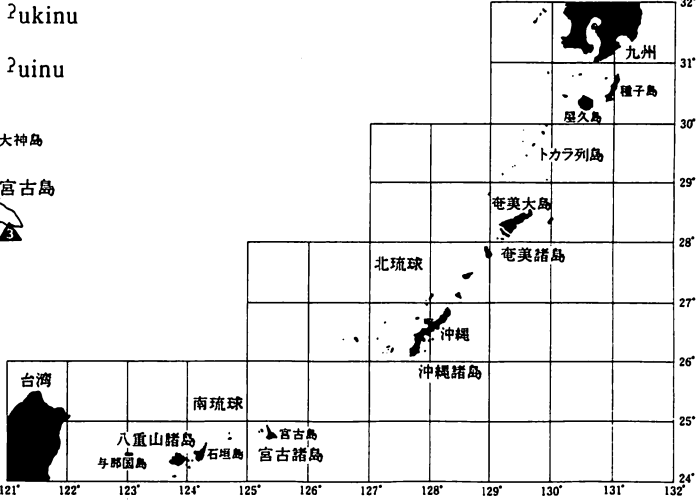


④ 2uijunu

⑤ Φukirunu

オキリヲリ系

♣ Φuijui



終止形「起きる」(リ系省略)

分布語

オキム系

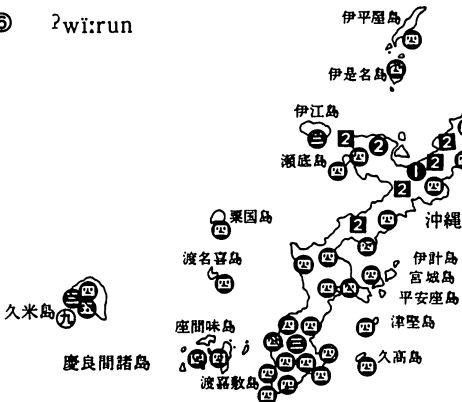
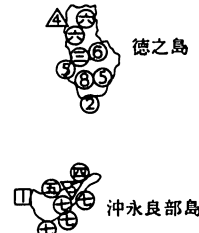
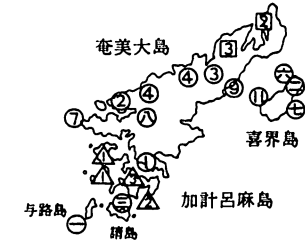
- 1 ukim
- 2 2ukin
- 3 uki
- 4 2ukun
- 5 Φukun
- 2uimu
- 2 2uīn
- 3 Φuīn
- 4 Φu:n

オキリラム系

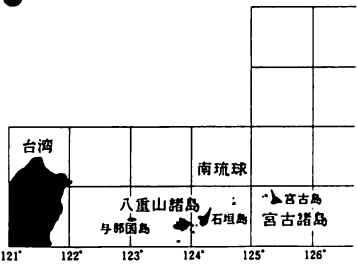
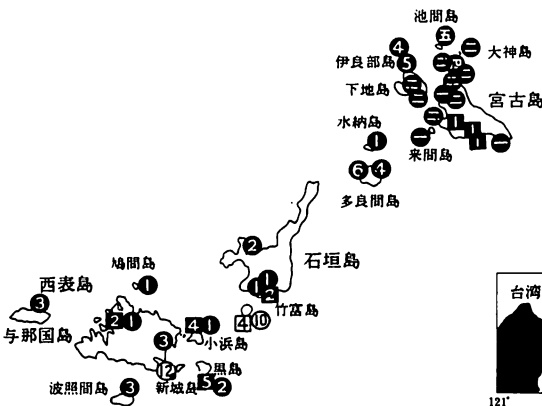
- 1 2ukirun
- 2 Φukirun
- 3 2ugirun
- 4 ukilm
- 5 ukil
- 6 ukirī
- ⊖ ukiīm
- ⊖ ukiī
- ⊖ 2ukijun
- ⊖ 2uki:n
- ⊖ 2uki:

- ⊖ 2uΦi:n
- ⊖ 2uçi:n
- ① 2uçirjum
- ② 2uīrjun
- ③ Φuīrjun
- ④ Φuīrun
- ⑤ 2uīrun
- ⑥ 2wī:run

- ⑦ 2u:rum
- ⑧ 2u:run
- ⑨ Φurun
- ⑩ Φuirun
- ⑪ wi:run
- ⑫ 2uçirun



- ⊖ wi:jum
- ⊖ wi:rjun
- ⊖ 2uījun
- ⊖ 2uijumu
- ⊖ 2uijum
- ⊖ 2uījun
- ⊖ 2uijun
- ⊖ xè:jun
- ⊖ Φuijun
- ⊖ 2uΦirjum
- ⊖ 2uΦijum
- ⊖ 2uxijum
- ⊖ 2wī:jun
- ⊖ wijun



接続形「起きて」

分布語

オキテ系

- ❶ Suki:ti
- ❷ (ʔ)ukiti
- ❸ Φukiti
- ❹ ʔuketi
- ❺ ʔugiti
- ❶❶ ʔuɕi:ti
- ❷ ʔuɕiti
- ❸ ʔuiti
- ❹ ʔuiti
- ❺ ʔu:ti
- ❻ ʔuti
- ❼ Φuiti
- ❸ Φuiti
- ❹ Φuti
- ❶❶ ʔwɪ:ti
- ❶❶ wɪ:ti
- ❶❶ ʔuiti
- ❶❶ xɛ:ti
- ❶❶ ʔukije

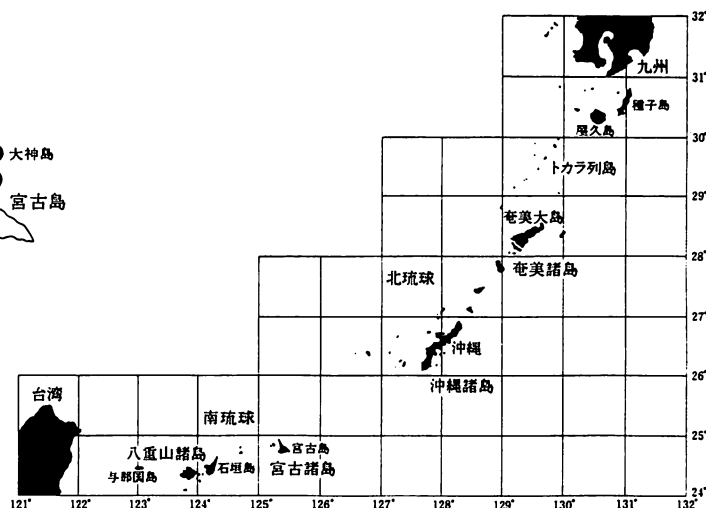
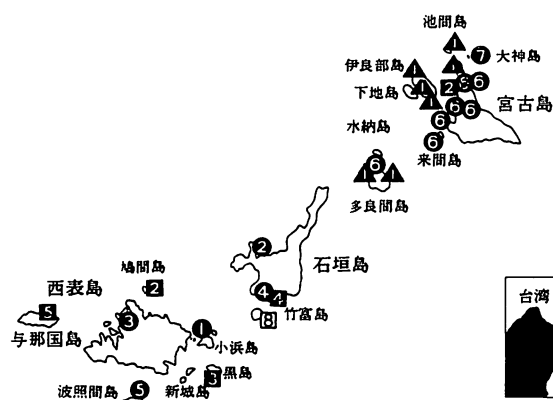
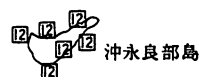
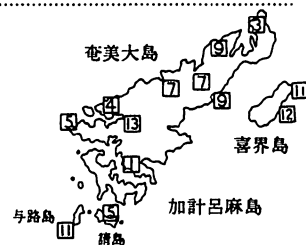
オキシタ系

- ❶ ʔukifiti

- ❷ Φukifiti
- ❸ ʔukifita
- ❹ ʔukette
- ❺ ʔugaʃita
- ❻ ukitti
- ❼ ukidu

オキ系

- ▲ uki:



過去形「起きた」

分布語

オキアリ系

▲ Φukehen

▲ ʔukjan

▲ ʔugjan

▲ ʔugan

オキタリ系

■ ukitam

■ (ʔ)uki:tan

■ (ʔ)ukitan

■ Φukitan

□ ʔu:itan

□ ʔu:itan

□ ʔu:itan

□ Φu:itan

□ Φuitan

□ ʔu:itan

□ wī:itan

□ ʔwī:itan

□ ʔuitamu

□ ʔuitam

□ ʔuitan

□ xē:tan

① (ʔ)ukita

② ukita:

③ (ʔ)ukuta

④ ukitaŕi

⑤ ukitaĩ

⑥ ukidu

⑦ ʔukida

⑧ ukida:

① ʔu:ta

オキシタ系

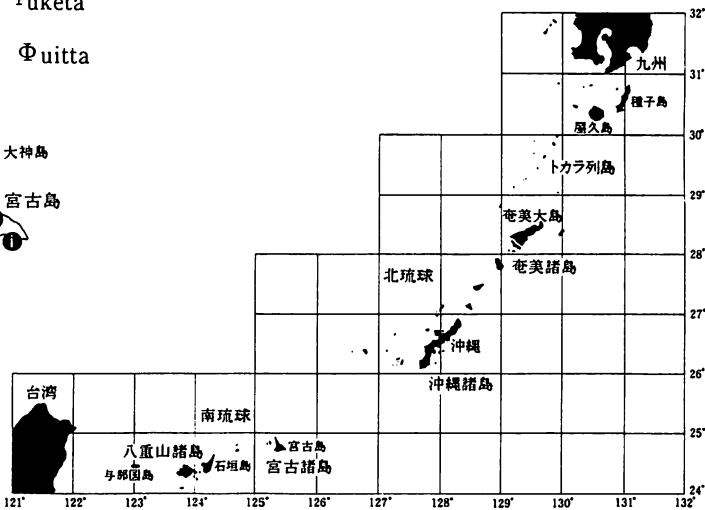
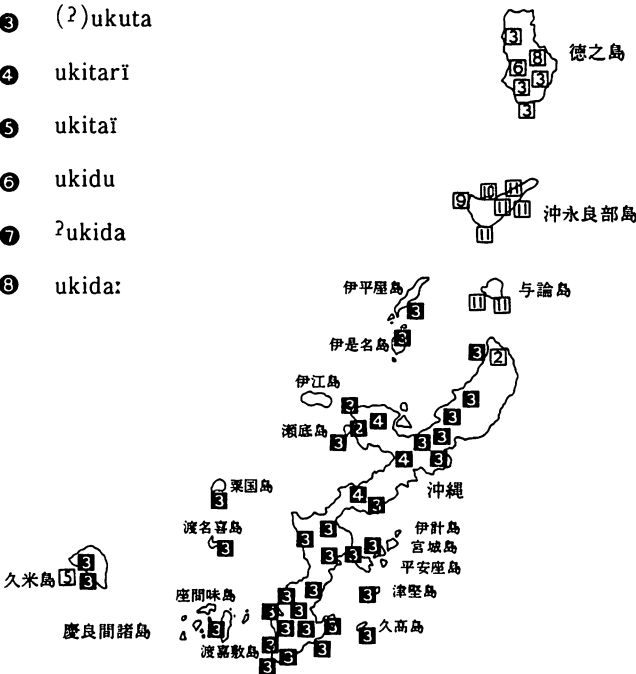
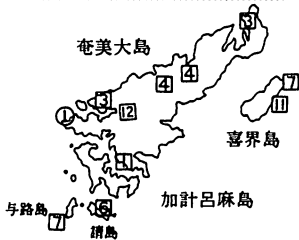
● ʔukifita

● Φukifita

● ʔuke:tta

● ʔuketa

● Φuitta



禁止形「起きるな」

分布語

オキルナ系

- 1 (2)ukiruna
- 2 2ukirina
- 3 Φukiruna
- 4 2ugiruna
- 5 ukilna
- 11 2uçirna
- 2 2uiruna
- 3 Φuiruna
- 4 Φuiruna
- 5 2uirina
- 6 2wīrina
- 7 2uijuna
- 8 2ujuna
- 9 2ukiina
- 10 (2)uki:na

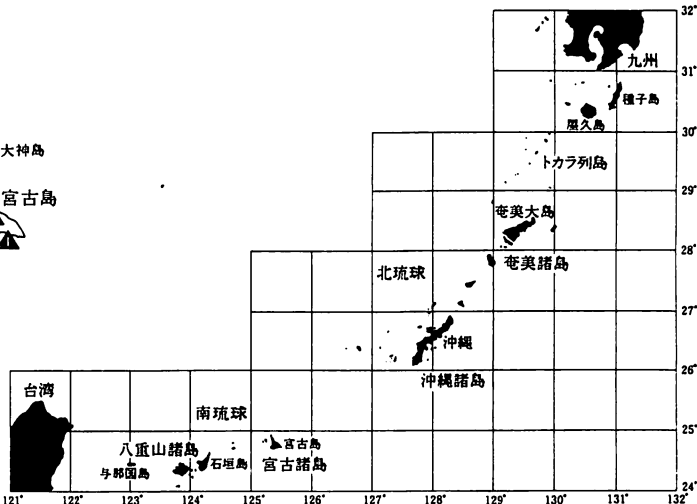
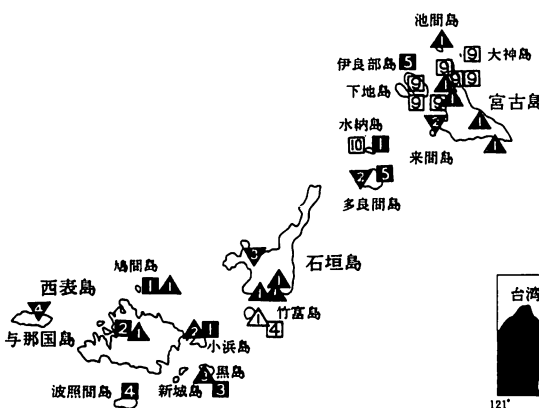
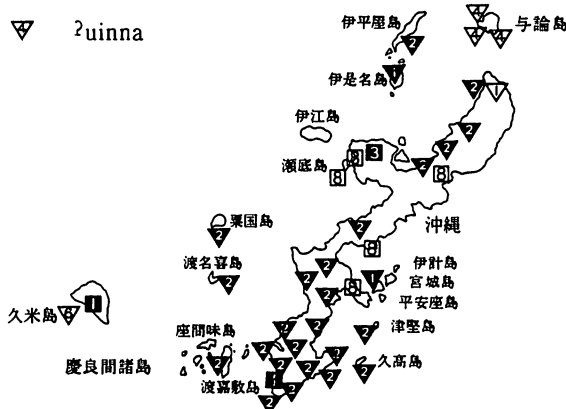
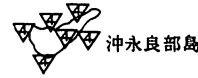
オキナ系

- ▲ (2)ukina
- ▲ 2ukuna
- ▲ Φukuna
- △ Φu:na

オキンナ系

- ▼ 2uki:nna
- ▼ (2)ukinna
- ▼ Φukinna
- ▼ 2uginna
- ▼ 2uçinna
- ▼ 2uīnna
- ▼ wī:nna
- ▼ 2uinna

- ▼ 2unna
- ▼ Φuinna
- ▼ xēnna



ōki

ōkure

ōkijō

では、琉球列島における二段活用の「起きる」はどのような形で用いられているだろうか。
北の奄美諸島から南下して考察することにする。

奄美諸島

1 佐仁	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	ʔuīran	ʔuīro	ʔuī	ʔuīrība	ʔuīrī
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	ʔuīn	ʔuīn	ʔuītī	ʔuītan	ʔuītun
	ʔuīri				
	(iii)禁止形				
	ʔuīnna				

佐仁における ī は、エ段に対応する音韻であるから、否定形、意志形、連用形、命令形における ʔuī の第二音節は、ke に対応する形である。「起き」の「キ」は、乙類の音韻であるから、乙類の「キ」が ke に対応する音韻に合流している。佐仁では甲類の「着」は kʔi であるから、キの甲類と乙類が kʔi と kī (→ī) で区別されている。k は h 音化して脱落しているが、広母音音節で起こっている現象である。

否定形の ʔuīran は、オケラヌに対応するから、ラ行音化した形である。それは意志形の ʔuīro にも及んでいて、オケラムに対応する形である。ʔokeramu→ʔuxīrau→ʔuīro: のように変化した。

条件形の ʔuīrība は、オケレバに対応していて、本来のオケレバにつながらない。

命令形の ʔuīrī は、オケレに対応する。活用語尾のヨにつながらない。

終止形は二形あって、ʔuīn が、連用形のオケにラム（居ム）がついた形であり、ʔuīri が連用形のオケにリ（居リ）がついた形である。ム系とリ系が併用されている。二形ある時は、終止形で併記し、過去形や継続形で現れる時には、いずれかで代表させる。

連体形の ʔuīn は、オケヌに対応する形であり、本来のオクルにつながらない。つまり本来の終止形オクや連体形オクルにつながる形が存在しないことになる。奄美大島の中心地の名瀬では、次のようである。

2 名瀬	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	Φuīran	Φuīro	Φuī	Φuīrība	Φuīrī
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	Φuīrjun	Φuīrjun	Φuītī	Φuītan	Φuītun
	Φuīrjuri				
	(iii)禁止形				

Φuĩruna

名瀬の Φuĩ は、 ${}^2okĩ \rightarrow {}^2oxĩ \rightarrow \Phi uĩ$ のように、第二音節子音の摩擦音が第一音節に及んだものと判断される。終止形の Φuĩrjun は、連用形がラ行音化したオケリにラム（居）がついた形である。さきの佐仁の 2uĩn は、オケにラム（居）がついた形でラ行音化が浸透していない。

瀬戸内の西端にある屋鈍は、

3 屋鈍	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	${}^2u:ram$	${}^2u:ro:$	2ur	2urĩba	${}^2u:rĩ$
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	${}^2u:rum$	${}^2u:run$	${}^2u:tĩ$	${}^2u:ta$	${}^2u:tur$
	${}^2u:rur$				
	(iii)禁止形				
	2unna				

のようである。否定形と意志形はともにラ行音化している。否定形語尾の -m は、否定の助動詞に付属してこれを形成するラム（居）の末尾が保持されたものと考えられる。

4 伊仙	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	2uĩran	2uĩra	2uĩri	2uĩtika	2uĩrĩ
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	2uĩrjun	2uĩrjun	2uĩti	2uĩtan	2uĩtun
	2uĩrjuri				
	(iii)禁止形				
	2uĩruna				

伊仙は徳之島の南部にある集落である。徳之島は全体として奄美大島に近い言語特徴を有する。否定形、意志形のみならず、連用形にまでラ行音化が浸透している。意志形の 2uĩra は奄美大島の 2uĩro などと語尾を異にしているが、語尾の変化が次のように異なっているためである。

$okeramu \rightarrow {}^2uxĩraũ \rightarrow {}^2uĩro: \rightarrow {}^2uĩro$ （奄美大島）

$okeramu \rightarrow {}^2uxĩraũ \rightarrow {}^2uĩra: \rightarrow {}^2uĩra$ （伊仙）

条件形の 2uĩtika は、オケテカラに対応する形である。条件を表すのに、助詞バをつかうより、テカラをつかう。

5 亀津	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	2uĩran	2uĩra	2uĩ	2uĩtika	2uĩrĩ
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	2uĩrun	2uĩrun	2uĩti	2uĩta	2uĩtun

ʔuĩrui

禁止形

ʔuĩrĩna

亀津は徳之島の南東部に位置する。連用形のʔuĩはラ行音化が現れていないが、終止形ʔuĩrunをみると、これを構成している連用形はʔuĩriのようにラ行音化したものと判断される。したがって、連用形もかつてラ行音化し、後に消えたものとみてよい。終止形のʔuĩrunは、ʔuĩrjunから変化したものである。一方のʔuĩruiはオケリヲリに対応する形であり、オケリの語尾のr音は保たれているのに、ヲリの語尾のr音は脱落している。このことから、終止形オケリヲリを構成した当時はr音脱落が起こっていなかったのに、構成されて以後にr音脱落が起こったことを示している。

条件形は連用形にテカラがついたオケテカラに対応する。テカラによって条件を表すのは伊仙と同様であり、徳之島全域で優勢である。

6 天城	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	ʔuĩran	ʔuĩra:	ʔuĩri	ʔuĩtika	ʔuĩrĩ
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	ʔuĩjun	ʔuĩjun	ʔuĩti	ʔuĩtan	ʔuĩtun
	ʔuĩjui				
	(iii)禁止形				
	ʔuĩjuna				

天城は徳之島の西海岸に面した集落である。終止形語尾をみると、ʔuĩjunのようにr音がなく、-junになっている点に特色がある。r音脱落が進んでいるためである。リ系の終止形もʔuĩjuiであり、奄美大島の-rjuriと比較するとr音脱落が顕しい。

7 辺土野	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	ʔu:ran	ʔu:ra	ʔu:ri	ʔu:tika	ʔu:rĩ
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	ʔu:jun	ʔu:jun	ʔu:ti	ʔu:tan	ʔu:tun
	ʔu:jui				
	(iii)禁止形				
	ʔu:juna				

辺土野は徳之島の西海岸に面した天城町の集落である。オケ（起）に対応するʔuĩにおいて、中舌母音が前の音節に吸収されて、ʔu:のように長音要素に変化している。終止形がʔu:junのように、r音を脱落している。

8 志戸桶	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	wĩ:ran	wĩ:ro:	wĩ:	wĩ:riba	wĩ:ri

(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
wĩ:jun	wĩ:jun	wĩ:ti	wĩ:tan	wĩ:tun
wĩ:jui				
(iii)禁止形				
wĩ:nna				

志戸桶は喜界島の北部にある集落である。オケ（起）に対応する wĩ: は、oke→wukĩ→wuxĩ→wuĩ→wĩ: のように変化した形である。意志形 wĩ:ro: の語尾は奄美大島と同じすがたである。終止形は wĩ:jun と wĩ:jui の両形があり、いずれも r 音脱落がみられる。

9 田皆	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	ʔuiramu	ʔuira	ʔui	ʔuirja:	ʔuiri
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	ʔuimu	ʔuinu	ʔuiti	ʔuitamu	ʔuitun
	(iii)禁止形				
	ʔuinna				

田皆は沖永良部島の西北端に位置する集落である。奄美地域のうち、沖縄の影響が強く及ぶ島である。終止形の二形のうち、ム系が優勢となって、リ系は用いられなくなっている。中舌母音は東部の国頭や畦布などにわずかに残っているだけであり、多くの集落ですでにこれを消失している。したがって活用形の中にも中舌母音は現れない。

否定形と意志形はラ行音化している。オケ（起）に対応する形は ʔui であり、oke→ʔuxĩ→ʔuĩ→ʔui の変化を経ている。語中における k 音脱落など、奄美地域の特徴をになった形である。否定形の語尾 -mu は、否定の助動詞「ぬ」の連用形「に」にム系の「ラム」がついた形から、語尾 -mu だけが残ったものである。これは与那国方言の否定の助動詞 -nun をみてもいえることである。意志形は ʔuira であり、徳之島と同様に -mu が脱落している。条件形は、ʔuirja: であり、助詞バに対応する ja が活用形と融合している。終止形の ʔuimu は、オケラムに対応し、ラ行音化していない連用形によって構成されている。連体形は ʔuinu であり、語尾 nu が沖永良部島でさかんに用いられる。

10上城	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	ʔuiram	ʔuira	ʔui	ʔuirja:	ʔuiri
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	ʔuijum	ʔuijunu	ʔuiti	ʔuitan	ʔuitun
	(iii)禁止形				
	ʔuinna				

^{かみじろ}
上城は沖永良部島の北海岸に面するところにある。否定形の語尾 -m と、終止形の語尾 -m とは、いずれもラム（居）の融合形語尾であるが、田皆の -mu より新しい形である。終止

形の ${}^2\text{uijum}$ は、オケリラムに対応し、ラ行音化した連用形で構成されている。ただし、 r 音を脱落させている。

11玉城	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	${}^2\text{uiran}$	${}^2\text{uira}$	${}^2\text{ui}$	${}^2\text{uirja:}$	${}^2\text{uiri}$
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	${}^2\text{uijun}$	${}^2\text{uijunu}$	${}^2\text{uiti}$	${}^2\text{uitan}$	${}^2\text{uitun}$
	(iii)禁止形				
	${}^2\text{uinna}$				

^{たまじろ}
玉城は沖永良部島の東部の町である和泊町の集落である。否定形の語尾と終止形の語尾がともに $-n$ となっている。これは $-\text{mu} \rightarrow -\text{m} \rightarrow -\text{n}$ のように変化したとみてよい。

12立長	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	${}^2\text{uirannu}$	${}^2\text{uiran}$	${}^2\text{ui}$	${}^2\text{uiribo:}$	${}^2\text{uiri}$
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	${}^2\text{uijun}$	${}^2\text{uijuru}$	${}^2\text{uiti}$	${}^2\text{uitan}$	${}^2\text{uitun}$
	${}^2\text{uijui}$				
	(iii)禁止形				
	${}^2\text{uinna}$				

立長は与論島の集落である。オケ（起）に対応するところが ${}^2\text{ui}$ となっているのは沖永良部島と同じである。与論島でも、 $\text{oke} \rightarrow {}^2\text{uxi} \rightarrow {}^2\text{ui} \rightarrow {}^2\text{ui}$ の変化を経たのである。中舌母音はまったくみられない。意志形の ${}^2\text{uiran}$ は、語尾に助動詞の $\text{mu} \rightarrow \text{m} \rightarrow \text{n}$ の変化を経ながらも、からうじて残している点に特色がある。終止形は、リ系とム系を併用している。与論島は両系併用の南限である。連体形語尾は $-\text{ru}$ である。与論島の茶花や麦屋においても、ほぼ同じ形である。

沖縄諸島

13首里	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	${}^2\text{ukiran}$	${}^2\text{ukira}$	${}^2\text{uki:}$	${}^2\text{ukire:}$	${}^2\text{ukiri}$
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	${}^2\text{ukijun}$	${}^2\text{ukijunu}$	${}^2\text{ukiti}$	${}^2\text{ukitan}$	${}^2\text{ukito:n}$
	(iii)禁止形				
	${}^2\text{ukiruna}$				

沖縄中南部の代表的な方言である首里をみることにしよう。 ${}^2\text{uki}$ （起き）は、オケに対応している。「着る」が t^2fijun であるから、上代語の甲類と乙類に対応する区別が、 t^2fi と ki で保たれている。第二音節の k 音が脱落しないのが特徴である。終止形の ${}^2\text{ukijun}$ は、オケリ

ラムに対応する形であるから、ラ行音化した連用形から構成されている。連用形の ${}^2\text{uki:}$ はラ行音化したオケリの語尾音節の r 音が脱落したと考えられる。ラ行音化は他の活用形にも侵透している。

玉城村奥武をはじめ、多くの中南部の方言がほぼ首里と同じである。

14石川	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	${}^2\text{ukiran}$	${}^2\text{ukira}$	${}^2\text{uki:}$	${}^2\text{ukira:}$	${}^2\text{ukiri}$
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	${}^2\text{uki:n}$	${}^2\text{uki:nu}$	${}^2\text{ukiti}$	${}^2\text{ukitan}$	${}^2\text{ukinna}$
	(iii)禁止形				
	${}^2\text{ukinna}$				

石川は中南部に属し、北部と接しているところである。条件形の ${}^2\text{ukira:}$ は、未然形にバがついた形が現れている

15津堅島	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	${}^2\text{ukiran}$	${}^2\text{ukira}$	${}^2\text{uki:}$	${}^2\text{ukiriba}$	${}^2\text{ukiri}$
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	${}^2\text{uki:n}$	${}^2\text{uki:ru}$	${}^2\text{ukiti}$	${}^2\text{ukitan}$	${}^2\text{ukitun}$
	(iii)禁止形				
	${}^2\text{ukinna}$				

沖縄本島の東海岸側に浮かぶ津堅島では、条件形が ${}^2\text{ukiriba}$ であり、助詞 ba が保たれている点、首里より古い。継続形が ${}^2\text{ukitun}$ であり、首里の ${}^2\text{ukito:n}$ と異なる。

16渡名喜	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	${}^2\text{ukiran}$	${}^2\text{ukira}$	${}^2\text{uki}$	${}^2\text{ukire:}$	${}^2\text{ukiri}$
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	${}^2\text{uki:n}$	${}^2\text{uki:ru}$	${}^2\text{ukiti}$	${}^2\text{ukitan}$	${}^2\text{ukitun}$
	(iii)禁止形				
	${}^2\text{ukinna}$				

渡名喜島は西海岸に浮かぶ島であり、基本的には首里と同じである。継続形が ${}^2\text{ukitun}$ であり、首里の ${}^2\text{ukito:n}$ と異なる。

17真喜屋	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	${}^2\text{ukiran}$	${}^2\text{ukira}$	${}^2\text{ukiri}$	${}^2\text{ukiriba}$	${}^2\text{ukire:}$
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	${}^2\text{ukirun}$	${}^2\text{ukirunu}$	${}^2\text{ukiti}$	${}^2\text{ukitan}$	${}^2\text{ukitun}$
	(iii)禁止形				
	${}^2\text{ukinna}$				

真喜屋は屋我地湾に面し、奥武島への入口のところにある。終止形は[?]ukirunであり、ラ行音化した連用形のオケリに、ラム（居）がついて構成されている。ラ行音化は他の活用形にも侵透している。条件形に助詞 ba をとどめている。

18与那嶺	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	[?] ukiranu	[?] ukira:	[?] ukiri	[?] ukiriba	[?] ukiri
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	[?] ukirun	[?] ukirunu	[?] ukiti	[?] ukitan	[?] ukitun
	(iii)禁止形				
	[?] ukiruna				

与那嶺は本部半島の今帰仁村にある。第一音節が[?]u であるところに特徴がある。語頭の母音音節の前に、喉頭や両唇の摩擦音が現れるのがこの方言の特徴である。他の形はほぼ真喜屋と同じである。

19名護	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	[?] ukiran	[?] ukira	[?] uki	[?] ukire:	[?] ukiri
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	[?] ukin	[?] ukinu	[?] ukiti	[?] ukitan	[?] ukitun
	(iii)禁止形				
	[?] ukinna				

名護は沖縄北部の中心都市である。終止形は[?]ukin であり、オケラムに対応している。連用形にはラ行音の影響が現れていない。真喜屋の[?]ukirun などと異なるところである。

20恩納	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	[?] ukiran	[?] ukira	[?] uki	[?] ukiruwa	[?] ukiri
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	[?] ukin	[?] ukinu	[?] ukiti	[?] ukitan	[?] ukitun
	(iii)禁止形				
	[?] ukinna				

恩納は北部の南端、中南部に接する位置にある。終止形が[?]ukin であり、ラ行音化の形が現れていない。

沖縄全域でみられるように、否定形の[?]ukiran または[?]ukiranu における -ra、意志形[?]ukira における -ra、命令形[?]ukiri における -ri は、いずれもラ行音化による音節である。奄美と沖縄にラ行音化が侵透しているといつてよい。

宮古諸島

21平良	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
------	--------	-----	-----	-----	-----

ukin	uki	uki	ukirja	ukiru
ukidʒa:n	ukidi		ukiruba	
(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
ukiĩ	ukiĩ	ukitti	ukittai	ukiduuĩ
ukiĩm				
(iii)禁止形				
ukiĩna				

平良は宮古島の中心都市である。宮古平良では「着物」は $k^s\text{in}$ であり、甲類のキは $k^s\text{i}$ で現れる。「起き」は uki であり、乙類のキは ki で現れる。つまり、甲類と乙類の音節が $k^s\text{i}$ と ki で区別されている。「煙」を kivsĩ といているから、乙類のキはケと合流していることになる。否定形の ukin はオケヌに対応し、 $^2\text{ukidʒa:n}$ は、意志形の $^2\text{ukidi}$ に否定を表すアラヌがついた形である。

命令形の ukiru は、オケロに対応している。語尾のロが現れるのは宮古諸島に限られている。この語尾は奈良時代の東国語に現れているから、相当に古い形とみてよい。

終止形は、 $^2\text{ukiĩ}$ と $^2\text{ukiĩm}$ の両形がある。 $^2\text{ukiĩm}$ は、オケラムに対応し、語尾 $-\text{m}$ が脱落して $^2\text{ukiĩ}$ ができた。

従来、宮古方言の終止形についていろいろ説かれてきた。「書く」の連用形が kakĩ であり、終止形が kakĩ と kakĩm で現れるところから、連用形 kakĩ と終止形 kakĩ が同形と説かれてきた。ところが「起きる」をみると、連用形が uki であり、終止形が ukiĩ と ukiĩm であり、連用形 uki と終止形 ukiĩ は別語形であることがわかる。終止形の ukiĩ は、オケラムの語尾ムを脱落させた形と判断される。したがって、「書く」の終止形 kakĩ も同様にカキラムの語尾ムを脱落させた形に相当するとみなしなければならない。この観点から、宮古と八重山の動詞終止形の成立を見直す必要がある。

22大浦	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	ukin	ukjo:	uki	ukiĩba	ukiru
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	ukiĩ	ukiĩ	ukitti	ukita	uki:uĩ
	(iii)禁止形				
	ukiĩna				

大浦は宮古島北部の集落である。意志形は ukjo: であり、オケヨウに対応する。平良の uki と異なる形である。

23友利	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	ukudʒan	uko:	uki	ukiruba	ukiru
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形

uki	uki	ukitti	ukita	uki:uĩ
ukim				
(iii)禁止形				
ukina				

友利は宮古島南部の集落である。否定形が ukudʒan であり、第二音節の母音は第一音節の母音に類推されたとみられる。意志形が uko: であり、その第二音節が後母音音節であるのも、この類推に有利にはたらいっているであろう。終止形は uki と ukim であり、ukiĩ や ukiĩm の中舌母音音節が脱落している。

24来間島	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	ukudʒa:n	ukudi	uku	ukiruba	ukiru
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	ukiĩ	ukiĩ	ukitti	ukitam	ukiduĩ
	ukiĩm				
	(iii)禁止形				
	ukinna				

来間島は宮古島の南端につらなっている島である。否定形と意志形が uku- となっている。

25池間島	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	ukin	ukidi	uki	ukiriba	ukiru
	ukidʒa:n				
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	uki:	uki:	uki:	ukitai	ukiui
	(iii)禁止形				
	uki:na				

宮古島の北端に浮かぶ池間島は中舌母音が弱化している方言が話されている。終止形の uki: は、ukiĩ が変化したものである。

26大神島	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	uki	uki	uki	ukirĩba	ukiru
	ukite:n	ukiti			
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	ukiĩ	ukiĩ	ukitu	ukitu	uki:uĩ
	(iii)禁止形				
	ukiĩna				

大神島は宮古島の東北端に位置する小島である。語中子音の無声化現象がはげしい。否定形の ukite:n は ukide:n における d 音の無声化によるものである。同様に意志形の ukiti は、ukidi に対応する形である。

27伊良部	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	ukin	uku	uki	ukiriba	ukiru
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	ukiĩ	ukiĩ	uki:	ukitam	uki:uĩ
	(iii)禁止形				
	ukiĩna				

伊良部は伊良部島の東端に位置する集落である。否定形が ukin で、意志形が uku のように、第二音節がイ段とウ段に分化している。

28長浜	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	ukin	ukidi	uki	ukiba	ukiru
		ukju:		ukiriba	
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	ukil	ukil	uki:	ukitam	uki:uĩ
	ukilm				
	(iii)禁止形				
	ukilna				

長浜は伊良部島の北部の集落である。この方言では「リ」に対応する音節が l 音で現れる。

29多良間島	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	ukiman	ukin:	uki	ukilba	ukiru
	ukin				
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	ukil	ukil	uki:	ukital	ukizul
	(iii)禁止形				
	ukilna				

多良間島は宮古島と石垣島の間位置するが、言語の基盤は宮古と共通する。否定形の ukiman は敬語であり、ukin は普通の表現である。意志形の ukin: は、オケムの助動詞の部分を残した形である。

30水納島	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	ukiman	ukin:	uki	uki:ba	ukiru
	ukin				
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	ukirun	uki:	ukitti	ukitan	ukizui
	(iii)禁止形				
	uki:na				

水納島は多良間島に近いところにあり、方言も類似している。ただ、中舌母音が弱化しているのがめだつ。終止形の ukirun は、中舌母音の弱化によって、ukirīm から変化したものである。

宮古諸島の方言をみていえることは、ラ行音化が及んでいないということである。これは奄美や沖縄に比べ大きな特徴である。宮古諸島の方言は奄美や沖縄より古い。

否定形について、uki- が宮古本島北部と周辺の島々に分布しているに対し、uku- は、宮古本島の南東部に多い。uki- が本来の形に近く、uku- が新しい発生であることはいうまでもない。

命令形の ukiru は宮古全域に分布している。他の琉球列島ではこのような形がなく、すべて ʔukiri のような形である。

八重山諸島

31石垣	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	ʔukunu	ʔuku	ʔuki	ʔukirja:	ʔukiri
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	ʔukin	ʔuki	ʔuke:tte	ʔuke:tta	ʔukin
	ʔukirun				
	(iii)禁止形				
	ʔukina				

石垣は八重山地域の主島である石垣島の中心都市である。終止形は、ʔukin と ʔukirun の両形をもつ。前者はオケラムに対応し、後者はオケリラムに対応する。ラ行音化が侵透しつつあることを示している。ただし、否定形と意志形にはラ行音化がまだ及んでいない。

32川平	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	Φukunu	Φuko:	Φuki	Φukirja:	Φukiri
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	Φukirun	Φuki:	Φukifiti	Φukifita	Φukibun
	(iii)禁止形				
	Φukinna				

川平は石垣島の北海岸に面した集落である。語頭の母音音節には両唇ないし喉頭摩擦音をとまう現象がある。

33竹富島	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	Φu:nu	Φuira	Φui	Φuirja	Φuiri
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	Φu:n	Φu:	Φuiti	Φuitta	Φuidura

Φ uirun Φ uiru

(iii)禁止形

Φ u:na

Φ uiruna

竹富島は石垣島に近い位置にあるが、言語は多くの特徴をもっている。語中の k 音が h 音化して脱落する現象があるが、「起きる」の活用形にもこれが反映している。これは、奄美諸島に起こった k 音脱落と同類のものである。

34黒島	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	Φ ukunun	Φ uku	Φ uki	Φ ukiriba	Φ ukiri
			Φ ukiri		
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	Φ ukun	Φ uku	Φ ukiti	Φ ukehen	Φ ukibe:ru
	Φ ukirun	Φ ukiru			
	(iii)禁止形				
	Φ ukuna				

黒島でも川平と同じく、語頭の母音音節に摩擦音をともなっている。終止形は、オケラム系とオケリラム系が併用されている。連体形もこれと平行している。

35小浜島	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	ʔukunu	ʔukira	ʔuki	ʔukiwa	ʔukiri
	ʔukiranu			ʔukiriwa	
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	ʔukun	ʔukiru	ʔukifiti	ʔukifita	ʔukin
	ʔukirun				
	(iii)禁止形				
	ʔukuna				
	ʔukiruna				

小浜島の終止形は、オケラム系の ʔukun とオケリラム系の ʔukirun が併存している。ラ行音化が終止形のみならず、否定形にも意志形にも侵透している。さらに条件形や禁止形の併用形はラ行音化の結果である。

36租納	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	ʔukun	ʔuko:	ʔuki	ʔukiba	ʔukiri
		ʔukira		ʔukiriba	
				ʔukirja:	
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形

² ukin	² ukiru	² ukifita	² ukjan	² ukibu:
² ukirun				
(iii)禁止形				
² ukina				
² ukirina				

西表島の西海岸に面したところに租納の集落がある。終止形は、オケラム系の²ukin とオケリラム系の²ukirun が併存している。他の活用形においてもラ行音化の浸透によって複数の語形を併用している。

37鳩間島	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	² ukin	² uka:	² uki	² ukiba	² uki
	² ukiran	² ukira		² ukiriba	² ukiri
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	² ukiru	² ukiru	² ukiti	² ukita	² ukibe:n
	² ukirun			² ukuta	
	(iii)禁止形				
	² ukina				
	² ukiruna				

鳩間島ではラ行音化が侵透している。否定形は、オケヌに当たる²ukin とオケラヌに当たる²ukiran を併用している。他の活用形においてもラ行音化による併用形をもっている。

38波照間島	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	² ugunu	² ugo:	² ugi	² ugiriba	² ugiri
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	² ugirun	² ugi	² uga:fita	² ugan	² ugibun
		² ugiru			
	(iii)禁止形				
	² ugiruna				

波照間島は琉球列島の最南端の島である。終止形の²ugirun にはラ行音化の影響がみられるが、否定形と意志形にはそれが現れていない。語中の k 音が有声化する現象がある。

39与那国島	(i)否定形	意志形	連用形	条件形	命令形
	² ugiranun	² ugiru:	² ugi	² ugirja	² ugiri
				² ugiruba	
	(ii)終止形	連体形	接続形	過去形	継続形
	² ugirun	² ugiru	² ugiti	² ugjan	² ugibun
	(iii)禁止形				

ʔuginna

与那国島は、琉球列島の最西南端の位置にある。語中の k 音が有声化する。否定形の ʔugiranun や意志形の ʔugiru: は、いずれもラ行音化した形である。

以上から、次のことが明確となった。

(1)「起き」の第二音節は奈良時代において乙類の「キ」であるが、これが琉球列島全域で、「ケ」に相当する音節となっていて、甲類の「キ」と区別が保たれている。したがって部分的ではあるが、琉球列島全域において、奈良時代の甲類と乙類の区別に相当する区別が今なお保たれているのである。

(2)ラ行音化が奄美諸島と沖縄諸島を中心に浸透し、さらに八重山諸島へ浸透しつつあり、宮古諸島には浸透していないことが明確になった。

(3)宮古諸島の命令形語尾はオケロのように「ロ」であり、奄美、沖縄、八重山ではオケレのように「レ」である。中央語の文語におけるオキヨのような「ヨ」は琉球列島全域でみられない。これらの琉球列島の分布から推定すると、中央語の「ロ」と「ヨ」の関係は「ロ」が古層であり、「ヨ」が新しい層であると考えられる。

参考文献

平山輝男、大島一郎、中本正智『琉球方言の総合的研究』明治書院、1966年

仲宗根政善『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店、1983年

中本正智『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局、1976年

中本正智「琉球語のカ変動詞 へ来る、の活用」『人文学報』194号、1987年

(東京都立大学人文学部)